

# わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第137号

イザヤ 65:1

平成19年2月23日

oo

主は人々の心を変えて、御民を憎ませ、彼らに主のしもべたちを、ずるくあしらわせた。主は、そのしもべモーセと、主が選んだアロンを遣わされた。彼らは人々の間で、主の数々のしるしを行い、ハムの地で、諸々の奇蹟を行なった。主はやみを送って、暗くされた。彼らは主のことばに逆らわなかった。主は人々の水を血に変わせ、彼らの魚を死なせた。彼らの地に、かえるが群がった。王族たちの奥の間にまで。主が命じられると、あぶの群れが来た。ぶよが彼らの国中にはいった。主は雨にかえて雹を彼らに降らせ、燃える火を彼らの地に下された。主は彼らのぶどうの木と、いちじくの木を打ち、彼らの国の木を砕かれた。主が命じられると、いなごが来た。若いいなごで、数知れず、それが彼らの国の青物を食い尽くし、彼らの地の果実を食い尽くした。主は彼らの国の初子をことごとく打たれた。彼らのすべての力の初めを。

詩篇105篇25-36.

毎年、教会暦の復活祭（イースター）が近づくといスラエルの民が隷屬下に置かれていたエジプトから解放者モーセによって救出された『出エジプト』の出来事を思い起こします。今年は英国の国会で奴隷売買禁止令が批准されて二百周年にあたり、英国では国家挙げての行事が記念すべき3月25日に向けて計画されているようです。奴隷を労働力として成り立っていた植民地でのタバコや砂糖農園からの収益で、十七世紀初頭から二百年以上も国家財政を維持してきた大英帝国が、ごく少数の聖霊に燃えたクリスチャンたちの奴隷制反対の声に、ついに応じざるを得なくなったこの画期的な出来事は、三月の記念行事を通して今日のクリスチャンたちの霊を覚醒させるきっかけを与えることごとになればと、大きく期待されています。

英国国会で、ウイリアム・ウイルバフォースを中心に少数の支持者たちが迫害、幾度かの失敗にもめげず、法案を通過させることができたのは、“神の御旨を聖霊の力で戦った結果の勝利”でした。背後でウイルバフォースを激励した人々の中には、メソジスト教会の育成に貢献したジョン・ウエスレーや奴隷船の船長から回心したジョン・ニュートンがいました。今日、イスラム教徒の影響力が強くなっている英国では、神のご介入による局面の打開、解放への叫びが日増しに強くなっています。人の心の中の問題、罪からの解放がなされないかぎり、私たちは肉的、物理的には解放されても、霊的にまだ隷屬下に置かれているのです。

今月は、出エジプトの出来事に目を留めて見ましょう。モーセがホレブの山（最近では、実際のホレブの山はシナイ半島のシナイ山ではなく、シナイ半島から紅海のアカバ湾を渡ったところ、今日のアラビア半島に現存していることが指摘されている）で羊を飼っていたとき、神がご自身を顕され、モーセはエジプトで隷屬下にあるヘブル人を救出する解放者として召名を受けました。出エジプト記は人間史と自然界の領域に神がご自身を行為を伴って顕される『シオファニー』で特徴付けられていますが、自然界に秩序をもたらされた神が、ご自身、力、神聖さ、威厳、王権を顕される一つの手段として、自然を混乱に陥れ、無秩序にさせられた結果もたらされた現象は、人間の目には「奇蹟」として映ったのでした。出エジプト記に記されている‘エジプトに裁きとして下された十の災い’、‘神の御臨在を象徴する雲と火の柱’、‘イスラエルの民が紅海の真中を渡った出来事’、‘打たれた岩から湧き出た水’、‘四十年間の日々の糧として与えられた天からのマナ’、‘食材として与えられた低空飛行するうずらの大群’、‘神の御臨在によって雲に包まれるホレブの山’等々はすべて、神のご介入、奇蹟でしたが、それら一つ一つの単発的な出来事よりも何よりも、それらが起こったタイミングこそが、エジプトの魔術師にも到底及ばない神にしかできない奇蹟だったのでした。

出エジプトの出来事を歴史的、考古学的に考証しようとする試みは多くの者たちによってなされてきましたが、1996年にアメリカの二人の科学者、ジョン・S・マーとカーティス・マロイによって発表された考証は画期的なものでした。伝染病の伝播経路に関心を持ち、聖書に記されている十の災い一つ一つの単発的な出来事として捉えるのではなく、流れとして捉えたとき、二人は十の災いがみな関連して起こるものであることに気づき、聖書の記事が神話的空想物語ではなく、十分に起こりうる現象、事実に基づいて記されたものであること、また何よりもこれら十の災いが一年の内にタイミングよく起こったことこそが奇蹟であると結論付けたのでした。二人の考証は、オーストラリアの科学者H・M・ダンカン・ホイテが1993年に発表した見解、十の災いが7月から8月にかけて始まり、翌年の4月から5月まで、十～十一月月に及んだこと、モーセがミデアンで神の召名を受けたとき、死んだことを知らされたエジプトのパロがトトメス三世（1479-1425BCE頃、ただし年表により20年前後の差がある）で、出エジプトが起こったときのパロがアメンホテプ二世であったこと、したがって、出エジプトの出来事は1440～1446BCEに起こったことすべてに一致しています。

この年代は、列王記第一6:1の記述「イスラエル人がエジプトの地を出てから四百八十年目、

ソロモンがイスラエルの王となってから四年目．．．」から、ソロモンの治世の第四年961BCEを出エジプト後四百八十年として逆算することによって割り出すことができ、聖書が裏付けているものです。また、エリコの陥落に関する昨今の考古学的考察から、パレスチナ地方にイスラエルが入ったのは、1400BCEであることが確認されているのです。しかし、この見解にあえて難があるとしたら、出エジプト記1：11の「パロのために倉庫の町ピトムとラメセスを建てた」という表記ですが、—この表記のゆえに、出エジプトの年代を二百年遅いラメセス二世（1279—1213BCE）の年代とする見解が多くの学者によって支持されてきたのですが— ラメセスは町の名前ではなく、多くのイスラエルの民を住まわせるに十分な広さの帯の地、地域の名前であったことが創世記47：11と27の記述から分かります。すなわち、「ラメセスの地」とはエジプトの民の住む地からナイル川を隔てて隔離されていた「ゴシェンの地」のことでした。また、ラメセス二世が町を建てたと主張したことが偽りであつという発見、町建立の信用が欲しかったラメセス二世が実際にそれらを建てた王たちの名前を消し、自分の名前に書き換えたという情報もあります。この情報は、ハトシェプスト女王（王女時代にモーセをナイル川から引き上げ、養子としたと考えられている女王で、父王トトメス二世の正妃の嫡出子であったことから偉大なる権力を誇った）のゆえに即位が遅れたハーレム生まれのトトメス三世がハトシェプストの名前を記念碑や神殿からすべて抹消したという史実からも、考えられないことではありません。

上述の二人の科学者は、エジプトに下された一連の災い—イスラエルの神のエジプトの神々への裁きとイスラエルの民の解放—を疫学、細菌学、昆虫学、毒物学の知識を駆使して次のように考証しました。

1. 最初の災い、『血に変わったナイルの水』（出エジプト記7：19—21）は、ある種の藻類の繁殖による赤潮の発生で起こりうる。この藻は酸素を吸収し、魚を殺す毒素を放出するため、水中の生物は死に、水は臭くなる。また、温暖な静水に突然発生するが短命で、二、三日で消失する。
2. 一匹が何十万個の卵を産む繁殖力旺盛な「かえる」（8：1—7）は、ナイルの水が腐敗し、食べるものがなくなったため、えさとなる虫を求めて、明るく暖かいところに集まる習性の『ひきがえる』であった。
3. 第一、第二の災いで自然界のバランスが崩れたことにより増殖し、人間と動物を襲ったのは吸血虫の蚊、『ゆすりか、ぬかか』の類とみなされる。今日の昆虫の分類は聖書の記述より千年以上後にアリストテレスによって初めて着手されたことなので、聖書では「しらみ」あるいは「ぶよ」（8：16—17）と表記。
4. ナイル川の魚と両生類の死により汚染した水が引くと、3. と、この災いが起こる。群生する「はえ」（8：20—21）はおそらく『家畜ばえ』で、家畜に噛み付き、痛みや害をもたらし、二次感染を引き起こす。
5. 『家畜を襲う疫病』（9：1—3、：6）はおそらく、『アフリカ馬病』で、ひづめのある哺乳動物だけが侵される。4. の家畜ばえは狭い領域内でしか移動しない比較的弱いはえで、川を越えてゴシェンの地に飛ぶことはなく、イスラエルとエジプトの家畜とが区別される現象が起こったと考えられる。
6. 「うみの出る腫物」（9：8—10）は、すでに「忘れられた病」と思われていたリンパ組織を侵すリンパ腺のできもので、実際には中東、アフリカで今日も発生している。4. の家畜ばえの媒介による二次感染が原因で起こったと考えられる。
7. 「雹」（9：22—26）は熱い地域でも生じる自然現象で、サイズは12mm～13cm大にも至り、危害は大きい。最近の例では、1997年10月、イスラエルとヨルダンを襲った雹は、1mにも積もったのであった。
8. 「いなご」（10：12—15）の群生は今日でも結構起こっており、北アフリカ、中東からインドのパンジャブ地帯にかけてよく発生する。地にある穀物、青菜、果物から樹皮まで完全に食い尽くしてしまう。
9. 『さわれる闇』（10：21—23）は、「さわれる」と明記されているように、サハラ砂漠からの熱い南風によってもたらされる『砂嵐』と考えられる。3～5月にかけて発生すると、二、三日は続き、太陽は遮断されて暗闇に覆われることになる。古代エジプトの墓や、スフィンクス、碑文などが砂の下に埋もれ、今日まで守られてきた理由はこの砂嵐にある。1997年春、カイロはこの砂嵐に見舞われた。
10. 最後のエジプト中の『初子の死』（11：1、：4—6）に関して画期的な解明が提示された。突然死の原因はかびの胞子によって引き起こされる中毒で、生み出された猛毒が肺から血液に入り、体内出血を起こし、死に至らしめるもので、猛毒マイコトクシンが湿った倉庫に蓄えられた穀物に繁殖したと考えられる。繁殖の最適温度26.7～43.3度、湿度62～99%、胚芽内の水分含有量13～20%の条件で考えられるのは、雹、いなごの害でほとんどの穀物が失われたエジプトが十分乾燥させないで大あわてで暗くて湿度の高い倉庫に取り込んだ初物の穀物にかびが繁殖したということで、世継ぎとなる長子優先の社会にあって、希少の穀物からの食事に最初にありつけたのは、「王座に着くパロの初子から．．．女奴隷の初子．．．家畜の初子」、すなわち長子で、皮肉にも悲劇はまず長子に起こったのであった。

この出エジプトの出来事における神の出現『シオファニー』は、千五百年後、イエス・キリストによって完成されることになる人類の罪からの解放における『シオファニー』のひな型、予型だったのでした。